

郷土研通信



ハンノキ

アイヌ語：ニタッ・ケネ（湿地のハンノキ）
樹皮を煎じて赤の染料補血剤に利用した。

発行：てしかが郷土研究会 (Teshikaga Regional Studies Association)
北海道川上郡弟子屈町中央3丁目2-10 (松橋方)

文章責任：松橋 秀和

近況報告

日置市訪問

町民ツアー雑感

去る一〇月二四日から三泊四日で姉妹都市の鹿児島県日置市を訪問する町民ツアーがあり、筆者が参加してきました。

日置市はご承知のことと思いますが、阿寒国立公園（現在、阿寒摩周国立公園）指定に貢献した「三恩人」のひとつり永山在兼の生誕地（東市来町―合併して日置市）です。

生誕地の近くには顕著碑が建立されていて、碑文には「ここに東市来と北海道弟子屈と未来をつなぐ」とあり、東市来町有志の方々の友情に改めて感慨を深くしました。

宿泊した伊集院町では、島津義弘公（島津家第一七代当主）を偲んだ「妙円寺詣り」



永山在兼顕彰碑（日置市東市来町）

の武者行列を見学することができました。



「妙円寺詣り」の武者行列

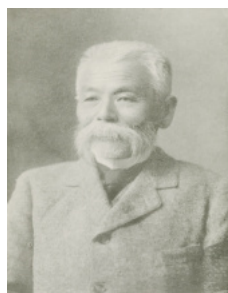
この行事は「関ヶ原の合戦」に薩摩藩が豊臣方として参戦するにあたり島津義弘公の菩提寺に参拝した故事に由来するとのこと。

明治維新直後の「神仏分離令」で廃仏毀釈が最も激しかった薩摩藩であり妙円寺も廃寺になり徳重神社となったが、その後、妙円寺が明治13年に復興したことからは始まった、とのこと。このような行事は江戸時代にはできなかったであろうと思う、二百数十年後に「関ヶ原」の仇を打った行事なのであるのか、と思うのは穿った見方でしょうか。歴史の織りなす複雑さを感じながら見学しました。

阿寒国立公園（現在、阿寒摩周国立公園）といえば重要な人物に「前田一步園」の前田正名がいます。鹿児島県立

歴史・美術センター「黎明館」に前田正名に関する資・史料が保管されていますが、今回の町民ツアーでは訪問することはできませんでした。

前田正名は鹿児島城下の生まれで、明治政府の農商務省次官を務めています。明治政府の進める欧米の機械産業とは違う地方（じかた）の農・工・商を発展させて「富国」にすることを目指す「殖産興業」政策を提唱しますが、時の明治政府には受け入れられることがなく下野し、自身の信念を在野で取り組みます。



前田正名

その一つに農林産業を目的に阿寒地方の山林を取得し、釧路地方の産業の一端になるきっかけを起しました。その山林を「切る山から観る山」に切り替えたことで阿寒・摩周・屈斜路の地域が「国立公園」に指定されることとなります。

現在、釧路の人たち（筆者を含め）と「前田正名」が釧路地方に残した業績を冊子にまとめ「釧路叢書」の一冊と

するべく三年計画で資・史料を収集し、調査研究の作業を進めているところです。
(松橋)

盛会でした

十二月の例会を兼ねた忘年会に会員八名、ゲスト二名が参加されました。水越武先生から頂いた美味しいお酒も手伝って、それぞれに近況の話に盛り上がり約三時間の会となりました。
みなさん、よいお年をお迎えください。



次回の例会

令和八年一月二一日（水）

一九〇〇

ふるさと歴史館

勉強会

未定

むかしむかし写真館

No. 361

川湯温泉の元祖 浅野清次

③ 会員 酒井盛興

真水の導水路

本格的に温泉経営に乗り出した清次のつぎの目標は安定した経営内容をトヨに残すことにあったのだろう。

逃げてしまったが、その理由のひとつに飲料水に苦しんだことも視野に入れなければならないだろう。

明治一九年に高橋貞蔵というひとが料理屋兼湯治場を建てたが数年で放棄して

料には適さない。そこで清次は「真水の川より運河を引いた」と五月女克氏の話にある。

清次の旅館の



湯川から真水を得るための導水路跡

裏手のアカエゾマツの林の中に真水が流れる川（湯川）がある。最短で百メートル位の地点から明らかに人工的に溝を掘った跡がブッシュの中にうねうねと続いた跡が残っている。太いアカエゾマツや岩石を避け、水位の落差を工夫し、真水を引き込むに

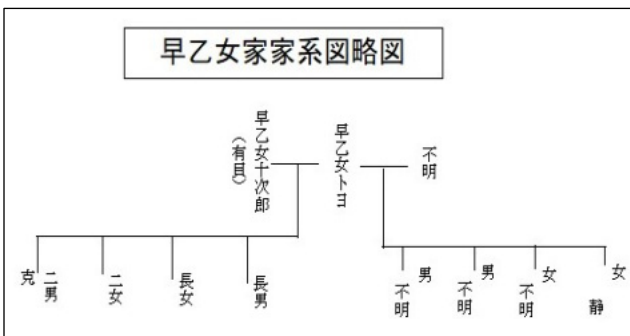


早乙女十次郎
『弟子屈町商工のあゆみ』から

は相当の時間と労力を費やしたものと思われる。

跡継ぎ

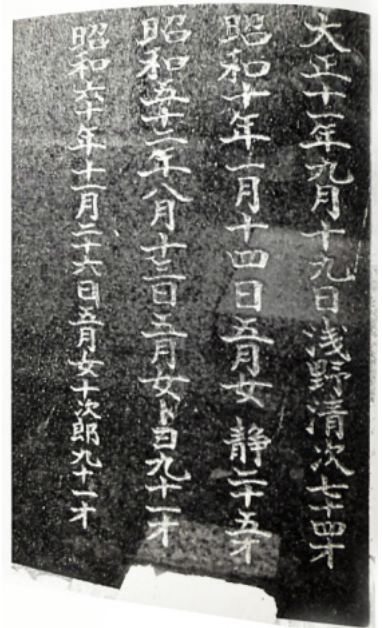
時代は下り大正七年、さ静岡の漆器商人「有貝十次郎」が川湯温泉に現れる。商品が売れたがなかなか代金が貰えず屈斜路の「黒滝初太郎」の牧場で馬丁などをしていたが、大正九年の洪水で帰るに帰られなくなってしまう、縁があったのであろう清次の養女トヨの婿として迎えられた。漆器商人「有貝十次郎」から「五月女十次郎」として④川湯屋温泉旅館を継ぐことになる。そのときトヨは子連れの身であった。その後五月女十次郎とトヨは川湯温泉の発展に寄与し、清次を川湯温泉の祖と



戊辰戦争で敗走した元会津藩士の生涯『俺の墓は飯盛山にある』2014年著者藤泰人氏が二男克氏に聞き取り書き留めたものを一部を加工し略図にした。

し、十次郎を川湯温泉の育ての親としている。

トヨの婿として十次郎に落ち着いてもらうのを確認したかのように、清次はその二年後の大正十一年「オレの墓は飯盛山にある」の



戊辰戦争で敗走した元会津藩士の生涯『俺の墓は飯盛山にある』藤泰人 著より



大正から昭和初期と思われる川湯温泉 (後方にマクワンチサップが見える)

言葉を残して世を去った。享年七十四歳。川湯温泉の墓地にある五月女家の墓には川湯温泉の元祖「浅野清次」の名前がある。川湯温泉にとつてどんなに貴重な人物であったか計り知れないものがある。(終)